

基礎看護教育における母性看護実習の取り組みと今後の課題

— 診療所実習を併行して —

濱 耕 子

The Present Condition of Maternal Nursing Training and Subject in the Basic Nursing Education at two Clinics and the Hospital

Kouko HAMA

要 約

少産少子化の背景にあり、臨地実習において学生が妊産褥婦や新生児の援助を行う機会が少なくなりつつある。母性看護領域では、学生がこれらの対象に必要な基礎看護教育の内容を修得し、看護のあり方を学ぶことを目的に病院と診療所の双方で実習を行ってきた。

本研究は、実習記録等の分析から、学生の学びの実態と現在の実習体制との関連について明らかにすることを目的とした。その結果、基礎となる看護技術の実施状況は外陰部消毒が4～5割、沐浴が8～9割であった。診療所での実習を組み入れることによって、実施率は高まっていた。その他の項目における実施状況は、分娩見学率は診療所での見学を合わせて8割であり、病院のみの4割より高かった。学生は妊婦保健指導や分娩見学実習において看護者の役割について学び、これに加え、診療所では母性看護に必要な援助の目的について学ぶことができた。

これらのことより、病院と診療所を併行する実習の有用性と今後の課題が示唆された。実習体制として、実習内容が各々の実習環境に適応するかを判断し、調整を行うことが必要である。併せて、実習に関わる事前準備や学習内容の共有化について充実させていくことが望まれる。

キーワード：基礎看護教育、母性看護実習、病院、診療所、実習体制

はじめに

長崎県における平成14年度の合計特殊出生率は1.48となった¹⁾。母性を取り巻く環境は少産少子化が進み、核家族世代の学生が妊婦や子どもにふれあう機会は減少する傾向にある。本学の母性看護実習において学生は、対象者及び家族の発達課題や、健康上の課題の理解と看護に必要な実践能力を養う目的²⁾で、母性を最も発揮する妊産褥婦の援助の方法を学習する。実習病院における経膈分娩後の在院日数は6日間、帝王切開術後の場合は14日間と短く、平成14年度の学生が妊産褥婦を受け持った割合は77.5%³⁾から62.3%⁴⁾と低下していた。これらの背景から、母性看護に関する基礎教育の内容について実習で学ぶ機会は今後も限られてくることが予想される。

カリキュラム改正（平成9年）時には既に、少子化に伴う施設数の減少や対象と家族の意識の変化とも相まり、地域における看護の視野を広げる意味から母性看護実習には多様な実習場所が求められる⁵⁾と報告されていた。このように実習に対する考え方が変化するなかで、学生が母性看護の学習を深められるよう、本学の母性看護実習では、診療所という新たな実習環境を提供してきた。

現在、本学看護学科では教育内容を見直しており、その結果を2年後に新カリキュラム（統合カリキュラ

ム)として導入する予定である。これと関連し、学生は10日間という短い実習のなかで、母性看護を修得するために必要とされる看護の基礎をどのように学んでいるのか関心を持った。基礎看護教育をすすめるための実習体制のあり方を考えることを目的に、本研究を実施した。母性看護領域において診療所実習を併行し、基礎となる看護の技術や援助を行った学生の学びをとおして、実習体制に関する今後の教育への示唆を得たので報告する。

I. 用語の定義

本研究で述べる「基礎となる看護技術」とは、母性看護の修得に必要な看護のなかで卒業時までには修得がのぞまれる実習項目をさす。

II. 研究方法

1. 調査対象

母性看護に関わる科目「発達と看護；母性」、「女性の健康と看護」の履修後に、平成14年10月から翌年2月に臨地で実習した本学の3年次生は62名であった。病院実習はA、Bのいずれかで行う。B病院は特定機能病院であり、褥婦を受け持つ機会が非常に限られるため、A病院の実習生49名を調査対象とした。

2. 調査方法

病院、診療所で行われた実習の実態について、平成14年度 県立長崎シーボルト大学母性看護学実習報告資料⁴⁾及び母性看護実習記録(以下、実習記録)に記載された内容から、以下の項目について調査した。

調査項目は、「基礎となる看護技術」のうち代表的な外陰部消毒と沐浴についての実施状況、母性看護に関わる基礎的な援助内容として外来妊婦保健指導と分娩見学の実施状況と学びの内容である。

3. 分析方法

外陰部消毒と沐浴、外来妊婦保健指導と分娩見学について、実習施設別に実施および見学率を集計した。外来妊婦保健指導や分娩見学から得られた学びは、実習記録[目標と達成度]、[見学レポート]より、学生が掲げた目標や各実習項目について「学びとなった」と述べている具体的内容を抽出し、帰納的に分析した。分娩見学における学びの内容は、伊橋⁶⁾の3領域3段階を参考に質的にカテゴリー化した。全ての質的な分析の作業には、複数の母性看護教員関わった。

4. 倫理的配慮

実習記録の提出後に調査対象へ研究の趣旨を文書にて提示し、全員から研究協力の承諾を得た。このとき調査結果は対象全体の学びとして公表されるため、学生個人のプライバシーは守られていることや学業の評価には影響しないことを説明した。

5. 実習の概要について

1) 実習方法(表1)

学生6ないしは7名のグループ構成により、病院と診療所双方の実習を行う。学生一人当たりの母性看護の実習期間は、病院実習が7日間、診療所実習が1日、学内実習が2日間の合計10日間であった。病院の外来実習は7日間のうちの半日であった。診療所はグループ成員が3~4名ずつに分かれ、C診療所、D診療所のいずれかを1日実習とした。診療所実習は男子学生の実習は認められず、女子学生の48名(C診療所、D診療所各24名)で実施された。

表1：実習配置（実習グループ成員が6名の例）

曜日	1 週 目					2 週 目				
	月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
学生1	病院(オリ)	病院	病院	診療所	学内実習	病院	病院(外来)	病院	病院	学内実習
学生2	病院(オリ)	病院	病院	診療所	学内実習	病院	病院(外来)	病院	病院	学内実習
学生3	病院(オリ)	病院	病院	診療所	学内実習	病院	病院	病院(外来)	病院	学内実習
学生4	病院(オリ)	病院	病院	病院	診療所	病院	病院	病院(外来)	病院	学内実習
学生5	病院(オリ)	病院	病院	病院	診療所	病院	病院	病院	病院(外来)	学内実習
学生6	病院(オリ)	病院	病院	病院	診療所	病院	病院	病院	病院(外来)	学内実習

オリはオリエンテーション

2) 実習配置と内容

①A病院の実習内容

原則として早期産褥・新生児期の母子を受け持ち、褥婦に外陰部消毒を、新生児に対し沐浴を実施する。受け持ち事例がない場合も、調整して各々を実施する。

実習2週目には健康診査のため外来に来院した妊婦について、保健指導を実施する。実習日までに学生はテーマ学習を行い、これに基づく指導案を準備する。実習前日に診療録の情報収集を行い、指導内容を個別化しておく。分娩見学に充てられる期間は、施設における実習期間の7日間であり、産婦の承諾があれば経膈分娩、帝王切開術分娩のいずれの場合も見学する。産婦1名に対し、学生1～3名が配置される。

②診療所の実習内容

C診療所では病院と同様に外陰部消毒、沐浴を行い、D診療所では外陰部消毒は許可されていないため実施せず、沐浴は見学実習としている。保健指導についてはC診療所、D診療所ともに見学実習としている。実習グループの配置例を表1に示す。分娩時には産婦の承諾があればC診療所の経膈分娩、帝王切開術分娩はいずれの場合も見学し、D診療所では経膈分娩を見学する。D診療所の帝王切開術分娩は許可されていないため見学しなかった。産婦1名に対し、学生1～2名が配置される。

Ⅲ. 結 果

1. 基礎となる看護技術の実施状況

1) 外陰部消毒（表2）

A病院にて実施した者は21名（42.8%）、実施には至らず、見学した者が2名（4.1%）、実施も見学もできなかった者が26名（53.1%）であった。C診療所では実施した者は5名（20.9%）、実施には至らず、見学した者が2名（8.3%）、実施も見学もできなかった者が17名（70.8%）であった。A病院、C診療所で実施した者を合わせて26名（53.1%）であった。

表2：基礎となる看護技術の実施状況（外陰部消毒）

（ ）内は%

実習施設 [実習学生数]	実 施	見 学	未実施・未見学
A病院 [49]	21 (42.8)	2 (4.1)	26 (53.1)
C診療所 [24]	5 (20.9)	2 (8.3)	17 (70.8)
A病院、C診療所 [49]	26 (53.1)		23 (46.9)

2) 沐浴（表3）

A病院では実施した者は40名（81.6%）、実施には至らず、見学した者が4名（8.2%）、実施も見学もできなかった者が5名（10.2%）であった。C診療所では実施した者は8名（33.3%）、実施には至らず、見学した者が7名（29.2%）、実施も見学もできなかった者が9名（37.5%）であった。D診療所は沐浴を見学した者は9名（37.5%）、見学ができなかった者が15名（62.5%）であった。A病院とC診療所、D診療

表3：基礎となる看護技術の実施状況 (沐浴)

() 内は%

実習施設 [実習学生数]	実施	見学	未実施・未見学
A病院 [49]	40 (81.6)	4 (8.2)	5 (10.2)
C診療所 [24]	8 (33.3)	7 (29.2)	9 (37.5)
D診療所 [24]		9 (37.5)	15 (62.5)
A病院、C、D診療所 [49]	43 (87.8)		6 (12.2)

D診療所では見学実習のみ

所で実施した者を合わせて43名 (87.8%) であった。

2. 外来妊婦保健指導

1) 保健指導の実施状況 (A病院実習) (表4)

母性看護実習では保健指導のテーマの例を挙げ、学生に主体的に指導案の作成に取り組ませている。実際に学生は保健指導を実施するにあたり、1つのテーマについて準備し、学内において模擬実習の過程を踏む。診療所で見学実習のできた学生もそうでない学生も、保健指導は指導対象がいた場合に承諾を得て行う。今回の学生が取り挙げたテーマのうち、保健指導が実施された例数は28例 (57.1%) であった。実施予定日に実施に至らなかった場合には再度、他の日に指導対象を選定した。実施されたテーマで多かったものは、「つわりがある時の生活の過ごし方」が6例、「体重増加の予防」、「妊娠時の姿勢、妊婦体操」、「妊婦貧血」が各々4例であった。

表4：外来妊婦保健指導実習のテーマと実施状況 - A病院 -

テーマ	立案数	実施数
つわりがある時の生活の過ごし方	8	6
体重増加の予防	7	4
妊娠中の歯の衛生	7	3
妊娠時の姿勢、妊婦体操	6	4
周産期の栄養	6	3
妊婦貧血	4	4
乳房の手入れ	2	2
里帰り分娩について	2	0
入院準備の確認と入院時期	1	1
マイナートラブル	2	0
妊娠による身体の変化	1	0
妊娠中の勤労と生活について	1	0
胎動	1	1
赤ちゃんの衣服について	1	0
合計	49	28

2) 保健指導実習における学び (表5)

保健指導に関しては診療所で見学し、その後病院で実施する実習形態をとっている。実習記録 [目標と達成度]、[見学レポート] の記載内容から、保健指導の実施や見学実習により得られた学びについて抽出した。学びの内容は、「看護者の役割」、「指導の目的」のカテゴリーに分類された。「看護者の役割」には病院、診療所に共通した項目と診療所独自の項目があった。「指導の目的」には診療所独自で項目が挙げられた。各カテゴリーに属する項目については、下線を付け以下に示す。「看護者の役割」には、妊婦の立場で家族の

表5：外来妊婦保健指導実習における学び

実習記録	学びを得た施設	カテゴリー	項目
目標と達成度	病院、診療所	看護者の役割	妊婦の立場で家族の存在の意味を理解すること
			妊娠中からの夫への積極的な関わりの必要性
			妊婦への言葉かけにより不安を与えない必要性
見学レポート	C診療所	看護者の役割	看護者における対象の性格や家族を含めた理解
		指導の目的	丁寧でゆったりとした妊婦への態度と言葉かけ
	D診療所	看護者の役割	前回の出産経験、家族背景を考慮した対応と信頼関係を育むこと
		指導の目的	夫をまじえた情報提供の必要性
			出産時や出生児を迎えるときの不安の軽減 (精神的援助) をはかること

C、D診療所では見学実習のみ

存在の意味を理解すること、妊娠中からの夫への積極的な関わりの必要性、妊婦への言葉かけにより不安を与えない必要性、看護者における対象の性格や家族を含めた理解、前回の出産経験、家族背景を考慮した対応と信頼関係を育むこと等が含まれた。「指導の目的」には正常で快適なマタニティライフを過ごせるよう援助すること、出産時や出生児を迎えるときの不安の軽減（精神的援助）をはかることが含まれた。

3. 分娩見学

1) 分娩見学状況（表6）

表6の分娩見学率は、実習日数に学生配置数を乗じたのべ率を記載したものである。A病院で経膈分娩を見学した者は4名（8.2%）、帝王切開術による分娩を見学した者は16名（32.6%）の合計20名（40.8%）であった。C診療所で経膈分娩を見学した者は9名（37.5%）、帝王切開術による分娩を見学した者は6名（25.0%）の合計15名（62.5%）であった。D診療所で経膈分娩を見学した者は24名（100.0%）であった。ふたつの診療所で見学した者を合わせ、経膈分娩を見学した者は33名（68.8%）、帝王切開術による分娩を見学した者は6名（12.5%）の合計39名（81.3%）であった。

表6：分娩見学状況

（ ）内は%

実習施設 [実習学生数]	経膈分娩見学	帝王切開術による 分娩見学	分娩見学総数
A病院 [49]	4 (8.2)	16 (32.6)	20 (40.8)
C診療所 [24]	9 (37.5)	6 (25.0)	15 (62.5)
D診療所 [24]	24 (100.0)		24 (100.0)
C、D診療所 [48]	33 (68.8)	6 (12.5)	39 (81.3)

分娩見学総数は経膈分娩、帝王切開術による分娩のいずれかを見学した数
D診療所では許可されないため帝王切開術の見学例なし

2) 分娩見学実習における学び（表7）

保健指導の項目と同様に、実習記録 [目標と達成度]、[見学レポート] の記載内容から、経膈分娩、帝王切開術による分娩に関わらず得られた学びについて抽出した。その結果、学生の学びは伊橋⁶⁾の3領域3段階のうち、認知領域と情意領域の各々で想起、解釈の2段階に分かれていた。表7は、各領域、カテゴリー名と対応する項目について示している。診療所独自の学びの項目には●を付記し、そのカテゴリー名は太字にした。

認知領域は想起の段階で「対象の理解」が、解釈段階で「分娩の援助」、「看護者の役割」の2つのカテゴリーに分類された。各カテゴリーに属する項目については、下線を付け以下に示す。「対象の理解」には産婦と胎児付属物の実際、出生直後の児の適応が、「分娩の援助」には分娩に積極的に取り組める援助（胎児に声をかける）、産婦をリラックスさせ分娩を進行させる等が、「看護者の役割」には分娩時の各職種の役割（助産師、看護師）、分娩の場における家族を含めた援助が含まれた。

情意領域は受け入れ段階で「家族の絆」、「対象から得た感動」、「生命の尊厳」、「職業観」、「分娩のイメージ」の5つ、反応段階で「生命の尊厳」、「対象の立場で考えること」、「看護者の役割」の3つのカテゴリーに分類された。受け入れ段階の「家族の絆」には母親と家族の生命誕生を願う気持ち等、「対象から得た感動」には分娩に伴う身体、精神の成長過程等、「生命の尊厳」にはビデオで得た学び等、「職業観」には将来助産師を希望した等、「分娩のイメージ」には自由な望みどおりの分娩ができる等が含まれた。反応段階の「生命の尊厳」には親への感謝等が、「対象の立場で考えること」には産婦として看護を受けることについて考えた等が、「看護者の役割」には良い分娩体験への導きが含まれた。

領域内における項目数は、認知領域では12のうち想起の段階が3項目（25.0%）、解釈段階が9項目（75.0%）であり、情意領域では41のうち受け入れ段階が32項目（78.0%）、反応段階が9項目（22.0%）であった。診療所独自の学びによる項目は、認知領域は12のうち5項目（41.7%）、情意領域は41のうち19項目（46.3%）であった。病院、診療所を合わせ、学びの数の多かったカテゴリーは、「家族の絆」、「対象から得た感動」であった。診療所独自で学びの数の多かったカテゴリーは、「分娩の援助について」、「生命

表7：分娩見学実習における学び—病院および診療所—

認知領域	カテゴリー	項目	情意領域	カテゴリー	項目
想起の段階 3	対象の理解 3	産婦と胎児付属物の実際 2 出生直後の児の適応 1	受け入れ段階 32	家族の絆 11	母親と家族の生命誕生を願う気持ち 8 ●家族で喜び見守る姿 2 夫婦間の絆形成 1
				対象から得た感動 9	分娩に伴う身体、精神の成長過程 6 母親が持つ女性の強さと冷静さ 2 分娩（帝王切開術）の素晴らしさ 1
				生命の尊厳 5	●ビデオで得た学び 3 ●母親の強さと生命の素晴らしさ 1 生命の誕生までの苦労と期待、不安 1
				職業観 4	●将来助産師を希望した 1 ●分娩に携わる仕事は素晴らしい 1 ●母子の安全と誕生を喜ぶ看護師 1 ●分娩時、対象と看護師が一体となった 1
				分娩のイメージ 3	●自由な望みどおりの分娩ができる 1 ●分娩には体力が必要 1 ●呼吸法には主体的に分娩を受け入れる効果がある 1
解釈段階 9	分娩の援助 6	●分娩に積極的に取り組める援助（胎児に声かける） 1 ●産婦をリラックスさせ分娩を進行させる 1 ●スタッフ間の連携 1 ●帝王切開術を受けるときの環境や看護師の動きについて 1 ●分娩体験を貴重なものとして扱う（記念に残す） 1 帝王切開術後の母児対面の重要性 1	反応段階 9	生命の尊厳 4	親への感謝 1 ●命を無駄にできない 1 ●自己の誕生を振り返った 1 ●精一杯生きて社会に恩返しをしたいと考えた 1
				対象の立場で考えること 4	●産婦として看護を受けることについて考えた 1 ●分娩台の産婦に出来る援助を考えた 1 ●あたたかい雰囲気での分娩を望む 1 帝王切開術を受けた母親に分娩時の気持ちを聞きたい 1
	看護師の役割 3			分娩時の各職種（看護師、助産師） 2 分娩の場における家族を含めた援助 1	看護師の役割 1

診療所独自の学び（●の項目）が多かったカテゴリー名を太字で示す。
表内の数は、カテゴリーおよび項目数

の尊厳」、「職業観」であった。

Ⅳ. 考 察

母性を取り巻く社会の変化により、実習の展開方法や内容も変化することが考えられる。また、実習期間の短縮や少子化による分娩数の減少は、学生が母性の対象に援助を行う機会を困難にすると予想される。われわれは平成14年度以前より、診療所を実習施設として確保してきた。基礎看護教育をすすめるにあたり望ましい実習体制のあり方を考える目的で、実習資料より学生の学習状況を調査した。

その結果、病院での外陰部消毒の実施状況は4割、診療所を含めると約5割であった。小山田⁷⁾は平成8年改正カリキュラム後に外陰部消毒の実施率が7割から4割に低下した実態を報告している。今回の学生の

実施状況が低かった結果には、A病院では帝王切開術の事例を受け持った場合にケアが行われず、施設によっては羞恥心を伴うケアであるために学生の実習が認められなかったことが影響したと考える。そのため、援助を行う機会が提供できるよう、施設側と計画的に調整していくことが必要となる。また、この実習項目では、学生が実施できたか否かに関わらず、事例に対して不利益のない環境づくりを行う看護者の役割について学ぶことができる。今後は実施状況のみならず、このような学生の学びが捉えられる資料を作成していくことが望まれる。

沐浴の実施状況は病院では8割を超え、診療所を含めると9割近くであった。この項目の実施状況は産婦褥婦の受け持ち率の6割より高かった。実習の全期間にわたり学習の機会を積極的に提供していることと、必ず教員の監視下で実施する取り決めがあることで、実施率は高い水準に保たれたと考える。

われわれは妊婦保健指導の項目を基礎看護教育の一環として捉え、学生に実習指導を行ってきた。これには、事前学習から学内実習、臨地における実習まで段階的な関わりが含まれる。学生が設定したテーマには妊娠による身体の変化（つわり、体重増加、妊娠時の姿勢、妊婦貧血）や生活上の対策（妊娠中の歯の衛生、周産期の栄養）に関するものが多く見受けられた。このようなテーマの特徴から、妊婦の意識に働きかけ、妊娠中の生活に伴う症状の改善のために行う指導内容が多かった。一方で、乳房のケアや分娩の経過など個人的な背景が大きく関与するもの、熟練した技術を伴うテーマを選択する者は少なかった。

小山田⁷⁾は妊婦の生活行動の理解とそれを踏まえた指導、また妊婦との人間関係づくり、面接、質問の技術の必要性から、臨地で行う保健指導の困難さを指摘している。本学では指導助産師とともに事前学習と診療録の情報収集の双方の機会を学生を支援し、保健指導場面に立ち会うという二重の体制を整えている。保健指導を実施する際には、学生の学習したテーマが各々の妊婦の指導内容に適應するのかを判断するとともに、妊婦に承諾を得た上で受療行動を妨げないよう配慮している。今回の学生による保健指導の実施率が6割近くに保たれているのは、このような実習体制や取り組みに支えられているためと考える。

実際に学生は病院での保健指導の実習により、「看護の役割」から妊婦とその家族への援助を意識した学びを見出ししていた。このカテゴリーには、前回の出産経験を理解することや妊娠中からの信頼関係づくり、家族の存在や背景を考慮する項目が含まれていた。このような継続看護や地域に根づいた看護⁸⁾は、母性看護の基礎教育で看護実践者を育成する過程においては、看護の本質を深めるための視点として重要である。

また、診療所では「指導の目的」を学び、マタニティーサイクル期の正常経過を促す援助、看護者が備えるべき出産期にわたる支援内容について認識していた。限られた実習期間のなかで指導の実際を見学することは、学生にとって指導内容の持つ看護上の意味がイメージしやすくなると考えられた。学内実習の質についても見直し、学生が指導対象や家族の特性を容易に理解できるような働きかけや、指導技術も含めて効果的な実習の展開ができるような教育内容を構築していくことが必要である。

分娩見学状況は病院のみでは4割であったが、診療所の見学を合わせると、8割と高い結果であった。今後、施設内分娩の減少や実習時間、学生立ち会い数の制限により、分娩期の援助について学習する機会が少なくなると予想される。今回の実習では、病院に比較し、診療所での見学の機会が多かったために、分娩見学の学びも診療所より多く得ている実態があった。本学の実習の特徴として病院での見学数が少ないために、分娩見学実習の環境として診療所にゆだねるところが大きい。また、学生は以下のように貴重な学びをしていた。認知領域は解釈段階までの学びが大半を占め、情意領域については受け入れから反応段階まで分散する傾向がみられた。実際に認知、情意領域の双方に「対象の理解」または「対象の立場で考えること」、そして「看護者の役割」についてのカテゴリーが存在した。この現象は、学生が実習において経験した看護のなかで既習の知識・技術・態度領域の統合⁹⁾をはかりながら、専門職に必要な役割、態度について学んでいることを示す。また、情意領域からは「家族の絆」、「生命の尊厳」を学んでおり、自らの母性観を深められていた。このような母性愛や母親としての意識や役割、それに対する結婚や家族についての認識は、母性看護を理解するために必要な内容である⁸⁾。施設別にみると、診療所の見学実習による学びは、カテゴリー内を占める項目数が認知、情意領域ともに多く、独自に「分娩の援助について」、「分娩のイメージ」について学んでいたことから、診療所は実際的に分娩期の援助を学ぶ環境として適していることが確認できた。また分娩が焦点となり、学生の「職業観」に反映していることがうかがわれた。したがって、今後も診療所実習

を継続していく必要性は高いと考えた。現実として、産婦の分娩経過は実習当日になっても予想できないところが大きい。加えて診療所の実習は、1日と短く非常に限りがある。今回の診療所実習において速やかに分娩に至ったケースもあり、分娩経過をともし見学できた学生の割合はこれよりさらに低くなると考える。病院では経膈分娩の見学は非常に少なかったが、帝王切開術による見学率は診療所に比べ高かった。分娩見学については実習施設の特徴を踏まえ、効果的に学びを得られるよう、学生に対し産婦に起こり得る経過と実習行動をイメージさせる働きかけが重要となる。また、見学した学生の学びをもとに、分娩経過の振り返りなどから学習内容を共有していくことも必要であると考えた。

V. 結 論

母性看護実習の基礎看護教育に関する学生の学びの実態を明らかにし、診療所実習を併行する実習体制との関連について考察した。

実習のあり方として、今後も診療所実習を継続することにより、実習環境の特性を生かしながら、実習内容を調整していくことが必要である。また、教育効果を上げるために学習内容の共有も望まれる。

1. 基礎となる看護技術については、5割以上の学生が実施可能であった。診療所実習を行うことにより、実施率が高まっていた。診療所実習を含めた各技術項目の実施状況は、外陰部消毒が1割増加して5割となり、沐浴はほぼ全員が実施できた。実習内容の受け入れの点で施設により条件に違いがあったため、施設側の意向を考慮した実習計画を立てる必要がある。
2. 妊婦保健指導はテーマ学習により実施し、6割の学生が可能であった。分娩見学の機会は診療所が多く、実習全体で8割の学生が可能であり、学びの数からも診療所実習で学びを得た者が多かった。また、診療所で行われる妊婦保健指導や分娩を見学した結果、学生は母性看護に必要な援助の目的について学ぶことができた。今後、事前学習から実施に至るまでの段階的な学習支援と施設側との協力体制により、臨地における実習の機会が得られると同時に学習効果が高まるよう、受け入れの充実に向けて協議を重ねていきたいと考える。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、ご指導をいただきました母性看護領域の内山和美先生に深謝致します。また、実習を快く受け入れて下さいました病院、診療所のスタッフの皆様、実習で関わった妊産褥婦の皆様に感謝致します。最後になりましたが、調査にご協力いただきました平成14年度3年次生の皆様に感謝致します。

平成14年度母性看護領域実習担当者
内山 和美
島田 友子
濱 耕子

引 用 文 献

- 1) 厚生労働省「人口動態統計(確定数)の概況」
http://srd.yahoo.co.jp/PAGE=P/LOC=P/R=14/*-http://www.pref.yamanashi.jp/toukei/DB/EDZ/DATA/EDZA_02000_H_15.xls
- 2) 平成14年度臨地実習要項, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部看護学科, 母性看護学, 2002
- 3) 平成13年度 県立長崎シーボルト大学母性看護学実習報告資料, 2001
- 4) 平成14年度 県立長崎シーボルト大学母性看護学実習報告資料, 2002
- 5) 伊藤政子, 田中博子, 村杉登志子ら: 母性機能が発揮される時期を中心として, 「看護教育」編集室編, 母性看護学 カリキュラム案とその展開, 27, 医学書院, 1996
- 6) 伊橋智江子, 菅谷千恵子, 河合節子ら: 母性看護実習での分娩見学における学習内容の検討, 旭中央病院医報, 21(1), 17-19, 1999
- 7) 小山田信子, 杉山敏子, 河本亜希子ら: 看護学生の母性看護実習領域における看護技術経験状況の調査, 東北大学医療

技術短期大学部紀要, 10(1), 48, 2001

- 8) 山田美恵子, 國廣晴美：地域看護実習を取り入れた母性看護学教育内容と方法, 「看護教育」編集室編, 母性看護学カリキュラム案とその展開, 医学書院, 9, 1996
- 9) 伊藤道子：母性看護実習が看護学生の母性意識の発達に与える影響, 母性衛生, 38(1), 32, 1997

参 考 文 献

看護学教育の在り方に関する検討会：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて, 2002 3月
厚生労働省医政局看護課：基礎看護教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 2003 3月